SMILES L2データ処理における逆問題の解析手法

眞子直 $<math>d^1$, 鈴木睦², 佐野琢己², 光田千紘³, 今井弘二⁴, 山田道 ξ^5 , 竹広真 $-^5$, 塩谷雅人⁶

¹千葉大/CEReS,²JAXA/ISAS,³富士通FIP,⁴とめ研究所,⁵京大数理研,⁶京大生存圏研

2013年 2月15日 平成24年度宇宙科学情報解析シンポジウム

内容



③ SMILESへの応用

- SMILESデータの解析
 - SMILESの逆解析方法
 - SMILESの実データ例

4 結論

おわりに
 まとめと今後の展望

◆□ > ◆母 > ◆臣 > ◆臣 > 臣目目 のへで

はじめに

SMILESの概要

超伝導サブミリ波リム放射サウンダ

Superconducting Submilimeter-Wave Limb-Emission Sounder

- 超伝導ミクサによる高感度観測
- 太陽非同期軌道での観測
- ~600GHzに3つの観測バンド
- O₃, HCI, CIO, HOCI, HO₂, BrO, etc.
- 大気観測: 2009/10/10 2010/04/21

序論 ○● SMILESへの応用 0000

Forwardモデル

$$y = F(x) + \epsilon$$

- x ··· 各高度の分子混合比(未知数)
- y ··· 各接線高度の観測輝度温度
- F ··· Forwardモデル
- ϵ · · · 観測ノイズ

線型近似(Taylor展開)

- $y = F(x_a) + K(x x_a) + \epsilon$
- $x_a \cdots$ 先験値(アプリオリ) $K \cdots \frac{\partial F}{\partial x}$

実際の解析では, x, x_a はn 行ベクトル, y, ϵ はm 行ベクトル, K は $m \times n$ 行列 $n \sim 250, m \sim 60,000$

はじめに

SMILES L2データ処理

逆問題の解析手法 ●○○○○○

SMILESへの応用 0000

^{速問題の難点} 不良設定問題

逆問題

y = $F(x_a) + K(x - x_a)$ 既知数yから未知数xを求める x = $x_a + K^{-1}(y - F(x_a))$?

特異値分解

 $\mathbf{K} = \mathbf{U} \mathbf{\Sigma} \mathbf{V}^T$

$$\boldsymbol{\Sigma} = \operatorname{diag}(\sigma_1, \cdots, \sigma_p, \mathbf{0}, \cdots)$$

 $\mathbf{U}^T\mathbf{U} = \mathbf{V}^T\mathbf{V} = \mathbf{I} \ (\mathbf{i}\mathbf{i}\mathbf{x})$

- 独立な方程式の数…
 行列のランク=正特異値の数(p)
- \Rightarrow 一般的なLimb観測ではm > n > p
- ⇒ 条件式が不足(不良設定問題)

More-Penroseの一般逆行列 $\mathbf{K}^{\dagger} = \mathbf{V}_{p} \mathbf{\Sigma}_{p}^{-1} \mathbf{U}_{p}^{T}$

最小二乗法

$$\chi^{2}(\mathbf{x}) = \sum_{i} \frac{(\mathbf{y}_{i} - \mathbf{F}_{i}(\mathbf{x}))^{2}}{\sigma_{i}^{2}}$$
$$\chi^{2}(\mathbf{x}) = (\mathbf{y} - \mathbf{F}(\mathbf{x}))^{T} \mathbf{S}_{v}^{-1} (\mathbf{y} - \mathbf{F}(\mathbf{x}))$$

- 不良設定問題→ χ²が小さい解は 無数にあり, 一意に求まらない
- 別の拘束条件 (c) が必要

Cost Function $M(\mathbf{x}) = \chi^2(\mathbf{x}) + c(\mathbf{x})$ $\chi^2 と c を同時最小化 (OEM,TRM,MEM)$

▲□▶▲□▶▲□▶▲□▶ □□ のQ@

0	¢)	

不良設定問題の解法

最適推定法 (Optimal Estimation Method: OEM)



序論

SMILESへの応用 0000

OEMの分散共分散行列 (S_a) について



高度相関



チコノフ正則化法 (Tikhonov Regularization Method: TRM)

TRMの拘束条件

• アプリオリとの差 $(\mathbf{x} - \mathbf{x}_{a})$ が小さく なるように拘束する $C_{\text{TRM}}(\mathbf{x}) = (\mathbf{x} - \mathbf{x}_{a})^{T} \alpha \mathbf{L}^{T} \mathbf{L} (\mathbf{x} - \mathbf{x}_{a})$ **L** … 正則化行列 α … 正則化パラメータ

正則化行列

- ・直接的に小さくする⇒ L = I (= L₀)
- ・間接的に小さくする⇒ L = L_n
 - L_nはn次の差分行列
 次数が大きいほど高度相関大
 (高度分解能悪くなる)

正則化パラメータ

 $c'_{\text{TRM}} = c_{\text{TRM}} / \alpha$ とおくと, Cost Functionは $M(\mathbf{x}) = \chi^2(\mathbf{x}) + \alpha c'_{\text{TRM}}(\mathbf{x})$ のように書ける. 正則化パラメータ α は, Residual χ^2 とConstraint c'_{TRM} の バランス調整の役割を果たす

- ● α が小さ過ぎる⇒ ノイズが多い解 ● α が大きすぎる⇒ 観測に無関係な解 ● α が適度⇒ 適度に平滑化された解
- TRMでは正則化パラメータαの決 定が非常に重要

TRMの正則化パラメータの決め方



- Residual ··· αの単調増加関数
- Constraint ··· αの単調減少関数
- Residual vs. Constraint曲線(L字型)
 - ⇒ L字の角…両者のバランス点
- 1点毎にリトリーバルを行う
 ⇒ 多大な計算時間が必要

- 平滑化誤差··· α の単調増加関数
- ノイズ誤差・・・ αの単調減少関数
- 平滑化誤差,ノイズ誤差は一般化 特異値分解で求められる
 - ⇒ 高速な見積りが可能

不良設定問題の解法

エントロピー最大化法 (Maximum Entropy Method: MEM)

MEMの拘束条件

$$c_{\text{MEM}}(\mathbf{x}) = -\alpha S(\mathbf{x})$$

 $S(\mathbf{x}) = -\sum_{i=1}^{n} q_i(\mathbf{x}) \ln [q_i(\mathbf{x})]$
 $S \cdots$ Shannonの情報量
 $\alpha \cdots$ 正則化パラメータ

2次のMEM

$$\begin{array}{rcl}
q_i &=& p_i / \sum_{i=1}^n p_i \\
p_i &=& x_{i-1} + x_{i+1} - 2x_i \quad (2次差分) \\
&+& 2(x_{\max} - x_{\min}) + \zeta \quad (正定数) \\
&>& 0
\end{array}$$

● パラメータ(q_i)は規格化されている

- アプリオリ(**x**_a)への依存度が小さい
- αの決め方はTRMと同じ
- Toyモデルを使ったテストでは TRM(L₂)とほぼ同様の結果が 得られている

HNO₃リトリーバルテスト結果



作言 all O

00	D	

SMILESデータの解析

SMILESの逆解析方法

ハイブリッド法 (OEM+TRM)

$$C_{hyb}(\mathbf{x}) = (\mathbf{x} - \mathbf{x}_a)^T \mathbf{S}_a^{-1} (\mathbf{x} - \mathbf{x}_a)$$

 $+ (\mathbf{x} - \mathbf{x}_a)^T \mathbf{L}^T \mathbf{S}_r^{-1} \mathbf{L} (\mathbf{x} - \mathbf{x}_a)$
 $\mathbf{S}_r : 正則化の"分散共分散行列"$

- MLSと同様の手法
 - MLSでは $\mathbf{S}_r = \alpha^{-1}\mathbf{I}, \mathbf{L} = \mathbf{L}_2$
- SMILESでは $\mathbf{S}_r = \alpha^{-1}\mathbf{S}_a$
 - **S**aを使ってパラメータを規格化
 - $-\alpha = 1, \mathbf{L} = \mathbf{I}$ ならばOEMそのもの
- O₃, HCl, HNO₃に適用
 - $\ L = L_1$
 - O₃, HCl $\cdots \alpha = 10$
 - HNO₃ $\cdots \alpha = 100$
 - OEMの高度相関も入れる(10km)

解の不確定性

$$\mathbf{S}_{x} = \left[\mathbf{S}_{a}^{-1} + \mathbf{L}^{T}\mathbf{S}_{r}^{-1}\mathbf{L} + \mathbf{K}^{T}\mathbf{S}_{y}^{-1}\mathbf{K}\right]^{-1}$$

⇒ 拘束条件が増えるほど逆数が増加

- ⇒ 不確定性は小さくなる
- 解の収束判定 現状では解の変動が解の不確定性 よりも小さいことが条件
 ⇒ TRM導入により収束率は悪化
- 有効高度範囲 $S_x \geq 測定誤差以外の成分,$ $S_c = \left[S_a^{-1} + L^T S_r^{-1} L\right]^{-1}$ の対角成分を比較し, $S_x / S_c < 0.25$ である範囲を有効とする \Rightarrow この方針でうまくいっている



逆問題の解析 000000

SMILESへの応用 o●oo

SMILESデータの解析

SMILESの実データ例 (O₃)

O3 (A), ut:20100331222537, lat:22.5 lon:-78.8, lt:17.2



ふりて 正則 ふぼやえぼや 山下 もくの

序論 00 逆問題の解析 000000 SMILESへの応用 00●0

SMILESデータの解析

SMILESの実データ例 (HCI)

HCI (A), ut:20100331222537, lat:22.5 lon:-78.8, lt:17.2



◆□ > ◆□ > ◆三 > ◆三 > 三日 のへで

序論 00 逆問題の解析= 000000 SMILESへの応用 000●

SMILESデータの解析

SMILESの実データ例 (HNO₃)





おわりに

まとめと今後の展望

まとめ

- SMILES L2データ処理の逆解析アルゴリズムとして, OEM, TRM, MEMの3つの手法について検討した
- 実際のL2データ処理では、以前から使用していたOEMとTRMを併用する形で導入するのが容易かつ効果が高いことが分かった
- これまでに, O₃, HCl, HNO₃の3分子種についてOEM+TRMを実装し, 高々度での振動の抑制などに成功している
- 現状では収束判定を以前と同じ方法で行っており、TRM導入によって 収束率が悪化した

今後の展望

- TRMに適した収束判定アルゴリズムの検討
- 高度別正則化パラメータの検討
- HO₂等, 輝線強度の弱い分子種についてもTRMの導入を検討する

References



Inverse Methods For Atmospheric Sounding: Theory and Practice World Scientific, 2000.

- A. Doicu, T. Trautmann, F. Schreier Numerical Regularization for Atmospheric Inverse Problems. Springer, 2010.
- J. Steinwagner, G. Schwarz, S. Hilgers Use of a Maximum Entropy Method as a Regularization Technique during the Retrieval of Trace Gas Profiles from Limb Sounding Measurement

J. Atmos. Oceanic Technol., 23(12):1657-1667, 2006.

D. J. Jacob

Lectures on Inverse Modeling

Harvard University, 2007.

Appendix

補足事項

SMILES L2データ処理の計算量



高精度化・高速化のための工夫

- AOSのサンプリング(800kHz)より 細かい50-100kHz間隔で計算 - 計算量8-16倍→計算グリッドの 最適化により計算量増加を抑制 Voigt関数の高性能計算法を新開発 - 速度2-3倍,精度4桁保証(Imai et al) 厳密なアンテナパターンの計算 - 計算量100倍→5倍程度に高速化 ラックマウントサーバー8台程度で、 観測時間の1/3程度の時間で処理可能
- Non-Voigt関数の取り込みを検討中
 - Speed dependent Voigt, Galatryで 計算量が2桁増える